



みのり

「元始,日本人は“農民”だった」…と言っても過言ではないくらい,日本の文化は農業中心で創造されてきました。特に,年中行事や祭なども五穀豊穡を願ったり,逆に豊穡を神に感謝したりなどといったように“農業”と深い関わりを持っています。

このコーナーでは,そんな日本文化の基幹である「農業」に携わっている方やそれに関する情報,それに伴う年中行事などを紹介します。

## 甘いぶどうへのこだわり



●ぶどう一筋40年 三川権三さん・よ志子さん(美多田町在住)



■昨今のワインブームにより,「ぶどう」に対する評価が高くなってきています。特にぶどうには,酒石酸などの有機酸や食物繊維,ペクチンやミネラルやビタミン類が豊富に含まれており,疲労回復・利尿作用・不眠症・貧血などに効果があると言われ最近では,果実に含まれる天然物質“レスベラトロール”にはガン抑制の働きがあると学会でも発表されているほどです。■そんな体にいいとされるぶどうの栽培にこだわっている方が市内にもいらっしゃることを,皆さんご存知でしょうか?その方は市内美多田町在住の三川権三・よ志子さんご夫婦。三川さんは,戦後の農地解放により土地を多く失い,米・麦に代わる農作物として,山形県の方からぶどうの苗を取り寄せ,畑に植えてみたのがぶどう栽培のきっかけだったそうです。しかし当時は近くに栽培法を教えてくれる人も無かったので,独学で勉強し,毎日が試行錯誤の繰り返しで,収穫がほとんど無い年もあり,軌道に乗るまで約10年ほどかかったそうです。その後,いろんな品種を試した結果,現在では巨峰を中心にデラウエア・キャンベルスアリーなどを栽培しており,収穫の時期には,広さ一万平方メートルのぶどう園内で白い袋をかぶったぶどう達が出番を待っているとのこと。■そんな三川さんのこだわりは,“ぶどうの甘さ”。「ぶどうは果物の中でも特に甘味が多く,みかん・なし・ももなどに比べて1.5倍の糖分が含まれ,比較的,房の先の方や内部の芯に近い方は甘味が薄くなっているのが普通ですが,その房全体を甘くするのがうちのこだわり!」と三川さん。そして,さらにこう繰り返します。「私たちにとって,ぶどう栽培は生きがいであり,生活の一部。ぶどうは我が子のように大切にかけがいのない存在であり,ぶどうで生活させてもらっているのだから,ぶどうが私たちの親になる時もある。そんな切っても切れない関係です。もう40年以上になるけど,自然が相手のためか,百点満点の結果の時はなく,85点が最高で毎日毎日が勉強ですよ!」と。

私たちにあって,ぶどうは「子」であり,「親」でもある。でも,何よりも忘れてはならないことは,生き物すべてが「自然」に生かされているということ。

現在では,スーパーなどに行けば何時でも野菜・果物が手に入るため,そのものの“旬”が忘れ去られてしまっています。

「ぶどうの栽培を通じて自然との付き合い方を知っている」三川さんご夫婦のような自然との絆を強くする生き方を私たちは忘れてしまっているのではないのでしょうか。そのためには,少しずつ自然と対話をし,自然の恵みのすばらしさを実感することが必要なのです。

### ●昔は女性のお祭りだった

## 端午の節供(旬)

「端午の節供」と聞くと,三月三日の“雛祭り”という女の子の節供に対する男の子の節供と誰もがイメージすると思います。

日本では「正・五・九月」という言葉にもあるように,五月は田植えの月で1年のうちで最も重要な月と昔から言われるとともに,田植え自体,穀物の霊魂を増やすために田の神を迎えて祭る神事とされてきました。田植えをするのは,生命を産み出す女性の役目で,“早乙女”と呼ばれ五月に“早苗”を植えます。早乙女の「サ」,

五月の「サ」,早苗の「サ」は全部,稲の穂,穀霊を表す言葉であり,そのため田植えという神事を行う女性は清浄さが求められ,とりわけ自分の結婚式などの私事を行うことは神をないがしろにすることとして禁じられていたのです。

このように,大昔の日本では「端午の節供」は男の祭りではなく,田植えに結び付いた女性のお祭りだったのです。

(参考:「日本の年中行事百科」河出書房)

